



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第十七主日A年（2026年7月26日）

第一朗読：列王記上 3 章 5、7－12 節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 8 章 28－30 節

福音朗読：マタイによる福音書 13 章 44－52 節

三つの朗読から

第一朗読で主なる神は「何事でも願うがよい」とソロモンに語りかけます。神さまに向かって何を願ってもかまわないのです。ソロモンの答えは、過去の出来事への感謝（6 節）、現在の自分の課題（7－8 節）、欠乏の表明（9 節）、そして未来への希望（9 節）で構成されています。そして「聞き分ける心をお与えください」と願います。ソロモンがなによりも願ったのは神の知恵でした。

第二朗読では、「万事が益となるように共に働く」と、神は召された人たち共に働くとあります。このようにして神は日常の出来事を通じて配慮して下さいます。わたしたちは、「ご計画に従って召された者たち」とあるように、あらかじめ神の愛によって選ばれ、義とされるように召されているからです。

福音朗読では三つのたとえが読まれますが、どれもがお弟子さんたちにとっては日常の出来事でした（畑、探し求める商人、魚でいっぱいの網）。先週の福音朗読にあったからし種のたとえもパン種のたとえも同様です。「何事でも願うがよい」と呼びかける神さまは、日常生活の出来事の中で働かれるのです。そういった日常での神さまの配慮に気がついた人は、まさに「天の国」の始まりをそこに見出すのです。その人は天の国の弟子、すなわち学者となれます。しかし、そのためにはソロモンが願ったように「聞き分ける心」、すなわち神からの知恵が必要となります。

福音朗読を眺めてみましょう。『マタイによる福音書』13 章では七つのたとえ話が語られます。今日は、その一番最後の三つと、13 章全体のまとめです。ここではイエスさまがお話になるたとえを聞いているのは弟子たちです。そして、弟子たちとはイエスのことばを聞いて理解した人たちに他ならないのです。

49節の「悪い者ども」とは、持ち物をすべて売り払ってでも手に入れたいと望む貴重な「天の国」に気づかない鈍感な人たちのことを指します。「畑の中の宝」、「探し求める高価な真珠」は日常の生活の中でも見出されるものです。そして、ひとたび見つけたなら、なんとしてでも手に入れないわけにはいかないものです。神さまの働きも同様に日常生活の中で見出されます。「天の国」とはそういったものなのです。しかし、そんな「天の国」の姿、現れに気づかない人のことを、ここでは「悪い者」と呼んでいます。

同じ49節の「より分け」はギリシア語では「アフォリゾー」といいます。分けて、別々にすることを意味します。別なところで次のようにあります。

「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分ける」（マタ25章31－32節）。

この言葉は世の終わりににおける最終的な選別を指しているのでしょう。

52節の「一家の主人に似ている」に注目してください。主人は自分の「倉」から新しいものと古いものを取り出します。ここでの主人とはイエスさまを暗示すると考えてよいでしょう。古いものとはユダヤ教の伝統、旧約聖書の教えを指します。一方で新しいものとはイエスさまの教えとなります。

同じ節の「学者」は、ギリシア語では「グラマテウス」と言います。これは「書く」（グラフオー）から派生した単語です。ほとんどの場合「律法学者」の意味で使われます。律法学者は自分の先生を「師」として仰ぎ見ます。そして律法という文字に仕えます。しかし「天の国のことを学んだ学者」は天の国の弟子となった人で、天の国から学び、天の国に仕えるのです。